

## 特集「日本の国家アイデンティティの形成と‘土着性’の問題」：「この国」の起原：本居宣長の思想とその影響

著者	渡辺 浩
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	11
ページ	231-242
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022473">http://doi.org/10.15002/00022473</a>

# 「この国」の起原：本居宣長の思想とその影響

渡 辺 浩

## 1.

現在の「日本国」では、「国民の祝日に関する法律」によって、「建国記念の日」が定められている。それは、「建国をしのび、国を愛する心を養う」ための「国民の祝日」である（「国民の祝日に関する法律」第2条、第3条）。この「建国」の日とは、現在の日本政府の存立の根拠になっている「日本国憲法」の施行の日（5月3日。1947年）ではない（その日は、「憲法記念日」という、別の「国民の祝日」である）。また、天皇を主権者とする「大日本帝国」が、アメリカ合衆国を中心とする「連合国」に降伏を申し入れ、「日本国国民ノ自由ニ表明セル意思ニ従ヒ平和的傾向ヲ有シ且責任アル政府ガ樹立セラルル」まで連合国の軍隊が日本を占領すること（「ポツダム宣言」第12条）を承認した日（つまり、「大日本帝国」が自己を否定し、「日本国国民ノ自由ニ表明セル意思」によって新しい「政府ガ樹立」されることを承認した日。8月15日。1945年）でもない。かといって、それまで3世紀近く続いた徳川家による全国統治の終焉を決定づけた「王政復古の大号令」が出された日（1月3日。1868年）でもない。

では、いつが、この国の始まりなのか（ちなみに、徳川家の支配した徳川日本（1600-1867）において、「国初」といえば、普通、徳川家が全国を支配する世の始まりを意味した）。

現在の日本の「建国記念日」は、2月11日である。それは、1874年以来、「大日本帝国」において「紀元節」と呼ばれ、1889年には「大日本帝国憲法」が発布された日である。

なぜ、2月11日が、国の「紀元」なのか。

それは、720年に天皇の政府が編纂した、天皇とその祖先等について記述した書（『日本書紀』）が、初代の天皇（神武天皇）が即位したとする日だからである（紀元前660年）。勿論、母は海の神の娘で、127歳まで生きたという人物の即位の年月日を、西暦に換算する意味と信憑性は大いに疑わしい。しかし、「大日本帝国」政府は、ともかく、最初の天皇の即位こそが「国」の始まりだと定めたのであり、その祝日は戦後一時廃止されたものの、1967年、「日本国」政府によって再び祝日とされたのである（無論、その時には、国民を主権者とする国にふさわしくないとして、強い反対があった）。

しかし、そもそもなぜ天皇が「日本」の統治者とされたのだろうか。「神武天皇」と呼ばれる神話的人物の統治に、いかなる正統性 *légitimité* があるのだろうか。

それは、無論、人民からの委任ではない。儒教的な中国の皇帝のような、「天」による委任でもない。『日本書紀』によれば、彼の祖父が、天上にある「高天原」（たかまのはら）という所から地上に下る時に、さらにその祖母である太陽の女神から、その子孫が地上の統治者となるよう、委任され、あるいは命令されたからである。そして、歴代の天皇は、みなその本質として、太陽の女神の孫（「皇孫」すめみま）であるからである。

これは、文化人類学者や神話学者、あるいはヨーロッパ中世の「王権神授説」の研究者には興味深いとしても、あまりに馬鹿馬鹿しい話と思えるかもしれない。しかし、確かに、その物語が、1945年まで、「日本」における統治権の正統性根拠の公式の説明だったのである（ちなみに、現在においても、天皇は、近代都市東京の中心にある彼の住まいにおいて、太陽の女神を祀っている。そして、彼女に祈る儀式を頻繁に行っている。ただし、現在の憲法との矛盾を避けるため、あくまで建前上は彼の私的行為として。）。

## 2.

「大日本帝国憲法」（1889年-1945年）第1条は、「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と定めている。「万世一系」とは、永遠につながる一つの血統という意味である。実際、同憲法の前文は、「国家統治ノ大権ハ朕カ之ヲ祖

宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ伝フル所ナリ」と述べている。では、その「祖宗」（祖先たち）は、どこから「国家統治ノ大権」を得たのか。その問いには、憲法発布の日に天皇がその祖先神に奉上した「告文」（こうもん）に解答がある。そこには、「皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ宝祚ヲ承継シ」（天皇である私は、天と地と共に永遠である大いなるはかりごとにしたがって、神々に由来する天皇の位を受け継いだ）と書かれている。

この「天壤無窮ノ宏謨」とは、『日本書紀』において、太陽の女神が、日本列島は自分の子孫が統治すべき地であり、「宝祚」（天皇の位）は「天壤」（天と地）に終わりが無いのと同様に終わりが無い、と述べたことを指している。このように、確かに、太陽の女神の言葉が、20世紀半ばまで、日本列島を統治する政治権力の存在根拠の正式な説明だったのである。

しかも、天皇統治のこのような説明は、単に、憲法前文などの形式的文飾ではなかった。それは、第一に、いわゆる国家神道という、一種の国家宗教 religion civile と、第二に、皇国史観と呼ばれる、ある歴史の見方と結合していた。しかもそれらは、政府によって、広く国民に教育されていた。つまり、儀式を伴う擬似宗教と特定の歴史の見方の教育が、天皇の統治を支えたのである（実際には、憲法によって立法議会が設けられ、天皇は立憲君主としてふるまったが）。それが、いわゆる明治天皇制国家の基本的構造である（その独特な在り方を、当時の言葉で「国体」と言う）。

憲法は、一方で、「日本臣民」に「安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」（国内の治安と秩序を妨げず、かつ、天皇の臣民としての義務にそむかない限度において、信教の自由を有する）と定めていた。しかし、その憲法自体が、實際上、他方で、すべての「臣民」に共通する信仰簡条を定めていた。それが、天皇は太陽の女神の子孫であり、日本は彼に統治される特別な国だという信仰である。それは、憲法との形式上の矛盾を避けるため、「宗教」ではないとされた。

そして、この「宗教」ではないはずの信条を維持し、普及させるために、内務省には神社局が置かれ、（元来は、さまざまな由来を持って現世利益のための崇拜の対象となっていた）大きな神社には国費から補助金が支出された。小学校には、天皇の肖像写真を安置した小さな祠が設けられ、その前を通過す

る時には一礼するように要求された。紀元節などには、学校で天皇への敬意を示す集会と儀式が行われた。

また、日本人は、少なくとも紀元前 660 年から一貫して、天皇を、そして天皇のみを、正統な統治者として戴いているという歴史観が、国定教科書によって学校で教えられた。もっとも実際には、何世紀にもわたって天皇が実権を失っていた期間がある。しかし、それは悲しむべき異常事態であって、徳川政府の崩壊によって改めて天皇の実権が回復し、今の素晴らしい国家体制が実現したのだ——そのように、この歴史の見方は教えた。

このように、天皇の正統性と「建国」とにかかわる神話と、それを前提にしたその後の歴史の解釈が、大日本帝国憲法によって確立し、1945 年まで続いた国家体制を支え、説明したのである。

さらに、1937 年に文部省が刊行し、広く頒布した『国体の本義』は、神々が日本列島を生み、さらに太陽の女神をも生み、そしてその太陽の女神がその子孫による建国を命じた、と詳述している。しかも、同書によれば、日本は「家族国家」であった。それは主に二つの意味においてである。即ち、第一に、天皇家は、すべての臣民の家の「宗家」（そうけ。もっとも古い、中心となる家）であって、しかも、天皇と臣民の関係は、父子の關係に近い（John Locke が批判したことで有名な Robert Filmer, *Patriarcha* (1680) を想起させる議論である）、という。その意味で、国は大きな家だということである。第二に、臣民の先祖たちは天皇に忠節だったのだから、現在の臣民が天皇に忠節を尽くすことは、先祖の行為に見倣うことであって、孝行でもある、という。天皇への忠と先祖への孝が一致するというのである。天皇と臣民の双方の家系の連続を前提にし、家々の集合として国家があるという意味での家族国家論である。

ちなみに、1899 年、フランスの Maurice Barrès は、次のように書いたという。

Nous venons de mettre sous vos yeux une loi importante de la production humaine : pour permettre à la conscience d'un pays tel que la France de se dégager, il faut raciner les individus dans la terre et dans les morts. (*La terre et les morts (Sur quelles réalités fonder la conscience française)*, 1899. Marcel Detienne, *L'identité nationale, une énigme*, Éditions Gallimard, 2010, p.154.)

これに対し、明治天皇制国家では、日本列島自体が、神々によって生み出され、その神々の子孫が今も天皇として統治しているとされ、そして、その臣民は神々の時代以来の臣民の子孫だとされたのである。つまり、国民意識は土地と死者たちに根ざさなければならないなどと、わざわざ主張する必要はなかった。Maurice Barrès が、もしも当時の日本の国制を知ったならば、さぞかしうらやましかったことであろう。

### 3.

以上のような神話・儀式・歴史観に支えられた国家が、20 世紀半ばまで続いたことは、一見奇妙に思えるかもしれない。西洋文明を摂取することに熱心だった明治の指導者たちが、1889 年に、このような国家を確立したことは矛盾のようにも見えるかもしれない。しかし、少なくとも、大日本帝国憲法起草の中心であった伊藤博文（1841-1909）によれば、実は、天皇を半ば宗教的な存在として国家の機軸に据えること自体が、当時の西洋の「文明国」の模倣だった。彼は、大日本帝国憲法の草案を審議する枢密院会議の冒頭、次のように演説した（1888 年 6 月 18 日）。

已ニ各位ノ曉知セラル、如ク、歐洲ニ於テハ当世紀ニ及ンデ憲法政治ヲ行ハザルモノアラズト雖、是レ即チ歴史上ノ沿革ニ成立スルモノニシテ、其萌芽遠ク往昔ニ発セザルハナシ。<sup>(コレニハンシ)</sup> 反<sup>(アタリ)</sup>之、我国ニ在テハ事、全ク新面目ニ属ス。故ニ、今憲法ヲ制定セラル、ニ<sup>(マク)</sup>方テハ、先ヅ我国ノ機軸ヲ求メ、我国ノ機軸ハ何ナリヤト云フコトヲ確定セザルベカラズ。機軸ナクシテ政治ヲ人民ノ妄議ニ任ス時ハ、政、其統紀ヲ失ヒ、国家亦<sup>(イヤシク)</sup>随テ廃亡ス。<sup>(ソモソ)</sup> 苟<sup>(ソモソ)</sup>モ国家ガ国家トシテ生存シ人民ヲ統治セントセバ、宜ク深ク慮ツテ、以テ統治ノ効用ヲ失ハザランコトヲ期スベキナリ。抑<sup>(ソモソ)</sup>モ歐洲ニ於テハ、憲法政治ノ萌芽セルコト千余年、独り人民ノ此制度ニ習熟セルノミナラズ、又タ宗教ナル者アリテ之ガ機軸ヲ為シ、深ク人心ニ浸潤シテ、人心此ニ帰一セリ。然ルニ我国ニ在テハ宗教ナル者其力微弱ニシテ、一モ国家ノ機軸タルベキモノナシ。仏教ハ一たび隆盛ノ勢ヲ張り、上下ノ人心ヲ繋ギタルモ、今日ニ至リテハ已ニ衰替ニ傾キタリ。神道ハ祖宗

ノ遺訓ニ基キ之ヲ祖述ストハ雖、宗教トシテ人心ヲ帰向セシムルノ力ニ乏シ。我国ニ在テ機軸トスベキハ、独り皇室アルノミ。是ヲ以テ、此憲法草案ニ於テハ専ラ意ヲ此点ニ用キ、君権ヲ尊重シテ、成ルベク之ヲ束縛セザランコトヲ勉メタリ。（『枢密院会議議事録』一）

伊藤がいう「憲法政治」とは、立法議会の設けられた政治という意味である（君主が、恣意的に権力を振るう絶対君主であることを自己否定して、憲法という権力行使の規則を制定するということは、同時に、人民の代表が集まった議会が立法に関与することを認めることである、それが「立憲君主政」constitutional monarchyである、という当時のヨーロッパで一般的な理解に基づく）。しかし、人民の代表である議員が法律の制定に関与する政治においては、これまでの政府に対して、強い遠心力が働く。その結果、国が分裂する可能性がある。しかし、古くから「憲法政治」を行っている欧洲各国にはキリスト教があって、それが人々の心を統合する機能を果たしている。しかし、日本には、そのような「宗教」が存在しない。仏教の影響力は弱まっており、民間の神道は宗教としての性質が弱い。そこで、欧洲のキリスト教の代替物が必要である。そこで、正にキリスト教の代わりとして、「皇室」を中心に置き、「皇室」を機軸とした国家のあり方を構想したのだ、というのである。

もっとも、おそらく伊藤自身は、太陽の女神に関する神話など信じていなかったであろう。しかし、無論、彼はキリスト教も信じていなかった。ただ、西洋「文明国」においても、全知全能の創造主が人間となってこの世に生まれ、しかも彼が人間に殺されて天に昇ったなどという驚くべき教義が重要な役割を果たしているとするならば、東洋において新たに「文明国」たらんとする日本にも、それに相当するものが必要だ。そう真剣に考えていたのであろう。

ただし、天皇を中心とする日本の国家像と歴史像は、伊藤博文が独創したものでは、無論ない。それらの一つの源流は、18世紀の本居宣長（1730-1801）の思想である。

#### 4.

18世紀、世襲の武士身分が支配する徳川日本では、17世紀初期以来の国内

外の安定と平和が続いていた。それは多くの人々にとって喜ばしいことであつたであろう。しかし、本来、戦闘を職務とする武士にとっては、起きそうにない次の戦争へ待機を代々強いられた退屈の連続でもあつた。彼等の存在理由さえ、怪しく思われてきた。そこで、一部の武士は、同時代の隣国、清国と朝鮮国において統治者を支える信条となっていた儒教に関心を寄せ、それを学ぶようになった。単なる軍人ではなく、「道」の模範を示す有徳な統治者として自己を再定義すること、それが一部の武士たちにとって魅力的に見えてきたのである。そのことを一つの背景として、17世紀末頃から、武士の間への儒教の浸透が進み、やがて、上級の町人 bourgeois や農民の間にも、儒教を学ぶ人が増えていった。

しかし、儒教の浸透に反撥を覚える人も少なからずいたようである。

特に問題だったのは、儒教に内在している中国中心主義だった。

即ち、儒教は一種の普遍主義である。その教えは、全人類に通用する正しい教えだと主張する。ただ、それが、たまたま中国の古代において、実行され、正確に認識され、記述された。そう信じる。人類の理想状態は中国古代に実現し、その記録と解釈が、全人類の教えとなるというのである。そして、その教えにその後ももっとも忠実に従っているのは、無論、中国人（漢人）だった。その意味で、中国は、全世界の中心だった。つまり、普遍主義であるために、實際上、中国中心主義となるのである。この普遍的であるはずの教えの基準からするならば、漢民族以外は、その教えの実行があまり出来ていない野蛮人（「夷狄」）だった。（以上の、普遍主義的であるが故に、強度に自己中心的になるという状況は、19世紀のヨーロッパ中心主義や、20世紀のアメリカ中心主義とよく似ている。ただし、フランスの *mission civilisatrice* や、イギリスの *whiteman's burden* といった観念に伴う、世界に強制してでも「福音」を届けようとする宣教師的情熱は、儒教にはない。文明の中心から周辺に攻めて行かなくとも、野蛮人自身が、中国を世界の中心にある模範として認め、それにあこがれ、それにみずから慕い寄って来るはずだと考える。）

そこで、儒教を日本人が学ぶ時、この中国中心主義にどのような態度をとるかが問題となった。儒教の教えが本当に全人類に妥当すべきものならば、自分たちを「野蛮人」と認めるのが正しいのかもしれない。しかし、それは、



古代以来、中国に対しても往々対抗意識を持って来た日本人にとって、楽しいことではなかった。そこで、山鹿素行（1622-1685）のような、「日本にも元来儒教の教えは存在した、日本もまた世界の中心だ」などという議論も出現した（『中朝事実』）。

そしてさらには、儒教自体を否定し、攻撃する体系的な思想も誕生した。その典型が、本居宣長の思想である。

本居宣長は、そもそも日本という国号を好まない。それは、「日本」とは、表記のみならず、発音も中国語であるのが、一因であろう。さらに、日本とは、太陽の出る方角である東の方角を示唆している。そのこと自体が、西にある大国への対抗意識を示しており、そのように敢えて対抗してみせること自体が周辺意識を自認することになるからである。彼は、往々単に「御国」（みくに）と言い、さらに、「皇国」（みくに）・「皇大御国」（すめらおおみくに）などと言う。単に、この、我々の「国」といえばよいのであり、性格付けをするならば何よりも「天皇の国」なのである。

そして、一貫して天皇の国であるということは、彼の考えでは、少なくとも二重の意味で、「この国」の「からくに」（いうまでもなく、彼は、西方の大国を中国・中華などとは呼ばない。「からくに」と普通呼ぶ。世界の中心はむしろ「この国」だからである）に対する優位性を証明していた。

第一に、「からくに」では何度も王朝が交替している。それは、無論、善いことではない。「からくに」は、くりかえし、身分の賤しい者が統治者の地位になりあがる、混乱した賤しい国なのである。

第二に、逆に、「この国」では一度も王朝交替が起きていない。それは、「天地と共に永遠に、太陽の女神の子孫が統治せよ」という、神の命令がそのまま実行され、実現しているということを意味する。それは、天皇が確かに太陽の女神の子孫であること、そして、「この国」が太陽によって選ばれた特別な高貴な国であることを証明している。さらに、そのことを記述した「この国」の古記録全体の信頼性の高さをも証明している。それ故、神々がこの列島と太陽の女神とを生んだという記述もまた疑うべきでない。宣長はそう主張するのである。

一方、「からくに」は、国が乱れがちであったために、国を奪い、さらに奪った国を保つための、もっともらしい教えが古くから発達した。それが、儒教である。それ故、儒教は、人を善くし、国と世界に平和をもたらすための教えだと称しながら、実際には虚偽であり、そのどちらにも役立たないのである。

本居宣長によれば、天皇が君臨し、臣下も人民も、それぞれに「家々の職業（ワザ）」を承け継ぐことによって、天皇に奉仕する。それが、これからも続いていけばよいし、続いていく。それが、「この国」の在り方だった（当時、実際の統治は徳川家によってなされていたが、それは天皇による委任だと説明する）。

このように、徳川日本における儒教の浸透が、反儒教思想を生み出し、それが、天皇の重要性を強調することになった。そして、そのことが、「王政復古」としての明治維新の生じる一因となり、さらに、徳川日本の否定が「王政復古」としてなされたことが、あの明治天皇制国家の確立へとつながっていったのである。

## 5.

なお、本居宣長が生きた、現実の徳川日本には、宣長のこの「国」のあり方の記述とも、明治天皇制国家とも大きく違う点がある。

それは、当時、すべての日本人が、古代以来一貫してこの列島に住む、この「国」の原住民 *autochtones* であるはずだとは、必ずしも考えられていなかったことである（なお、東アフリカを出発したホモ・サピエンスが日本列島に到着したのは、実際には4万年ほど前であるらしい。溝口優司『アフリカで誕生した人類が日本人になるまで』（ソフトバンククリエイティブ、2011年））。そこには、「日本人は大きな血縁共同体だ、先祖を同じくする共通の血でつながった親戚集団だ」という意識もなかった。そのような共通の出自の意識こそが、*nation* を成り立たせるものだ、と考えるならば、当時、*nation* はなかった。徳川家の統治に服し、当時の日本人らしく生活していれば、その人の遠い出自は、問題にならなかったのである。

現に、徳川日本（それは、通常理解では、琉球国やアイヌの人々の住む地域は含まない）では、大名や武士も、先祖が、中国から渡来したことや、16世紀末の豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に朝鮮から連れてこられた捕虜だなどということは、隠さない。それはきまりの悪いことではなかった。

例えば、有名な学者、新井白石（1657-1725）が書いたすべての大名家の系譜と伝記『藩翰譜』（1702年）には、大名の先祖が中国から渡来したことを明確に記述している（第十上「秋月」・第十二下「坂崎」）（「大名」とは、徳川将軍に仕える武人貴族で、各地域を統治する領主である）。例えば、九州の大名、秋月家については、「先祖遠く漢朝より出たりけり」とし、さらに、そのような王朝の子孫が今も続いており、しかも堂々と一地方を統治していることは、「本朝の一美事なり」と評している。白石の考えでは、中国の天子の子孫が日本で大名をしているというのは、日本にとって誇らしいことだったのである。

また、秀吉の朝鮮侵略の際に拉致されてきた朝鮮の学者たちは、往々優遇され、儒者として大名に仕えたりもした。中には、紀州徳川家の娘と結婚した人もいる（矢沢康祐「江戸時代」における日本人の朝鮮観について」、朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』6、1969年）。また、熊本の大名が設置した学校、時習館の教授、高本紫溟（たかもと・しめい）（1738-1813）も、朝鮮捕虜の子孫であり、その苗字は、高麗の高と、日本の本を継ぎ合わせたものだという。しかも彼は、しばしば李順・李紫溟と、朝鮮名で署名したという。

朝鮮の苗字のまま、武士として大名に仕えていた人もいる。例えば、紀州徳川家の家来には、呉官治左衛門（ご・かんじざえもん）・李佐保之介（り・さほのすけ）という人がいた（大石学「近世日本社会の朝鮮人藩士」（『日本歴史』640号、2001年9月））。

さらに、古賀（劉）精里（1750-1817）・高良（趙）陶齋（1713-1786）のような儒者ともなれば、その中国の姓を誇示するように示し、その出自に誇らしげである。また、19世紀初め、当時の将軍に仕えていた柴木家の先祖は、「豊太閤の時に、童にて姉と、もに、片桐市正にいけどられて、皇国に來たれり。」ということであり、また、慶長年間に水戸の浦に漂着した「大明太原県の者」の子孫は代々水戸徳川家に仕え、太原（おほはら）氏と称していたという（『兎園小説』）。

つまり、出自はどうあれ、当時の日本に定着して言語・風俗などにおいて周囲の人と同様に生活しているならば、「日本人」だったのである。「日本人」であるか否かを決めるのは、共通の遠い先祖を持つか否かではなかった。

なお、1879年に、明治政府が、南方の小さな半独立の王国、琉球国を「沖縄県」として日本国に編入した際、日本政府は、やはり支配権を主張していた清国政府に対して、主に「島津家久による琉球征服」（1609年）を論拠に正当性を主張したという。「同一民族」「同一人種」などが論拠ではなかった。同一の「民族」だから、同一の政府の下にあるべきだなどという考えではなかった。ただ、ながく続いてきた政治的支配という事実が、その支配権を他国の政府に認めさせるに十分な根拠だと、この時には考えたのである（與那覇潤『翻訳の政治学：近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』（岩波書店、2009年）第2章「国境の翻訳論：「琉球処分」は人種問題か、日本・琉球・中国・西洋」）。

『日本書紀』の記述する、神々が生んだという日本列島の中に、琉球諸島や北海道は含まれていない。無論、台湾も含まれていない。朝鮮半島が含まれていないのも勿論である。つまり、『日本書紀』などを根拠とした、日本列島の autochtones に対する天皇の統治というだけでは、その政府の支配領域の帝国主義的拡大は説明できないし、正当化も難しい。一方、西洋に始まった人種主義が、19世紀末から20世紀半ばまで、強い影響力を持っていた。このような事情が、「国体」の思想が、人種主義を利用しつつ、「白人」たちの欧米に対抗する「亜細亜」の指導者としての日本という、本居宣長が想像もしなかった主張へと拡大していった一つの原因であろう。

<ABSTRACT>

## **The Origin of “This Nation”: Motoori Norinaga’s Thought and Its Influences**

WATANABE Hiroshi

According to the “Constitution of the Empire of Japan” (1889-1945), the emperor had all the rights of sovereignty of the state. How did he acquire those rights? The answer is the mandate of his ancestor, the sun goddess. An old myth that the sun goddess gave such a mandate to her grandson and his descendants when her grandson descended from heaven was the foundation of the Empire until the middle of the 20<sup>th</sup> century. Ito Hirobumi, the framer of the Constitution had believed that “religion” was necessary for integrating people in civilized nations. But, unlike Christianity in western nations, traditional Japanese religions were powerless for this purpose. Therefore, the emperor-worship had to be the core of the Japanese people in place of Christianity in western nations. That was Ito’s idea.

An origin of the belief that emperor is the core of this nation is Motoori Norinaga (1730-1801), who wrote a detailed commentary on a mythical chronicle of the imperial house, written in the 8<sup>th</sup> century. Criticizing Confucianism, he established a nationalist system of thought and it was instrumental to the collapse of the Tokugawa regime and to the establishment of the Empire of Japan.